太棹

第百三十五號

昭和十六年三月廿八日 第三種郵便物認可
昭和十七年五月廿三日 印刷納本
昭和十七年五月廿五日 發行
（毎月一回廿五日發行）
太棹（第百三十五號）

野澤道之助待合を始めた
三度に一度は行かずばなるまい
ズンベラ〳〵
向島にて十六島田が出て來で（サアビス）
酒も梅よし行かずばなるまい
ズンベラ〳〵

本所區向島須崎町九五
御待合　梅よし
電話墨田四七五五（シナイイイ）番
水島春枝
道順（須崎町電停より半丁先交番前電車通りを左へ入り右へ曲つて二軒目）

淺草區雷門二丁目一九
淺草宅　野澤道之助
電話淺草三七九（ミナク）番

松幸
すき燒
和洋御料理
淺草公園（千束二ノ三四）
牛鍋本店
電話根岸〔〇三八〇番 〇〇〇〇番〕

風流・金ぶら・茶漬
（美地句）
大日屋
新橋二ノ八
電銀二〇八

第一回翼扇會

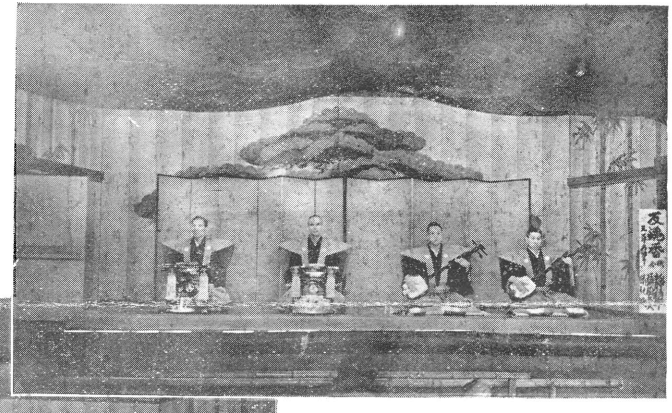
大切掛合

名筆傾城鑑

吃の段

又平・歌之助　靜　翠
將監・奥方　特別出演
修理之助・お德　彌國太夫
絃　豐澤扇之助
ツレ　豐澤猿喜知

（寫眞上）



道中膝栗毛

赤坂並木より庵寺の段

彌二郎兵衛　猿喜知
喜太八　扇之助
親父　松市郎
長松　絃内
和尚　和孝
絃　豐竹駒登太夫
ツレ　駒榮

（寫眞下）

二代目竹本綾之助

前號報道の如く竹本佳照師は本年一月逝去した竹本綾之助の遺言に依つて二代目を襲名し五月廿六日明治座に於て華々しく襲名披露會を催した。

故松林福笑氏追善義太夫會（その一）

前號既載の通り一月二十日狹心症の爲め急逝した松林福笑氏の追善義太夫會は四月廿九日並木倶樂部に開催。多數の出演者を以て盛會を極めた。

寫眞は祭壇前に於ける未亡人と令息。

故松林福笑氏追善義太夫會（そのニ）

（記念撮影）

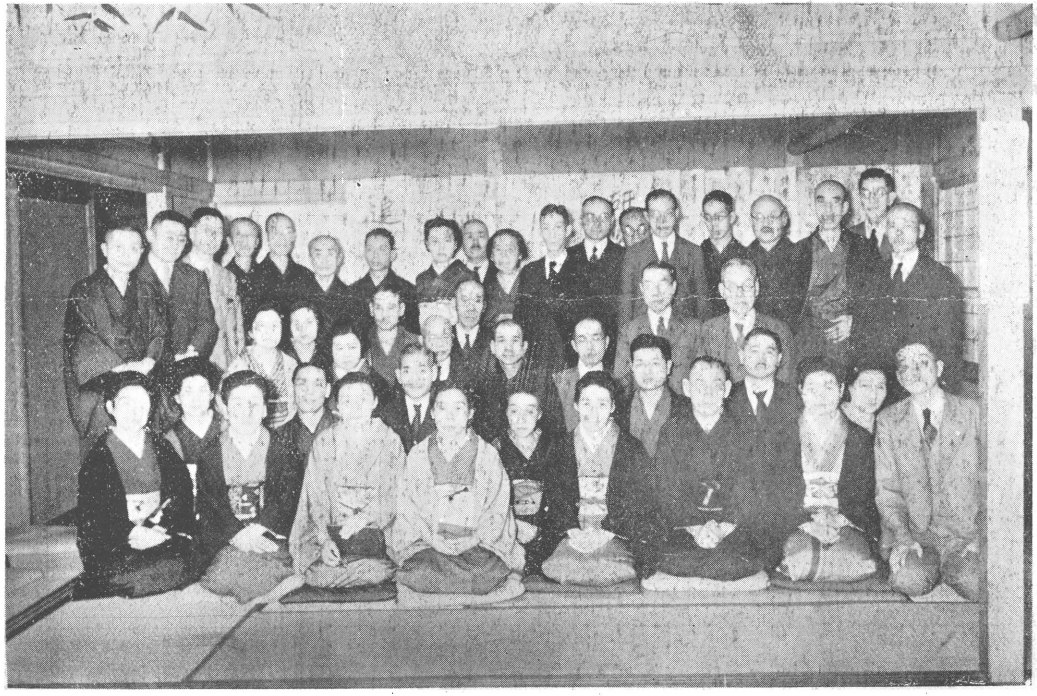
故松林福笑氏追善義太夫會（そのニ）

福笑氏とは最も別懇の交風あり し柴野筑波氏は竹本相生駒師の絃で『酒屋』を語つて故人の靈を慰めた。

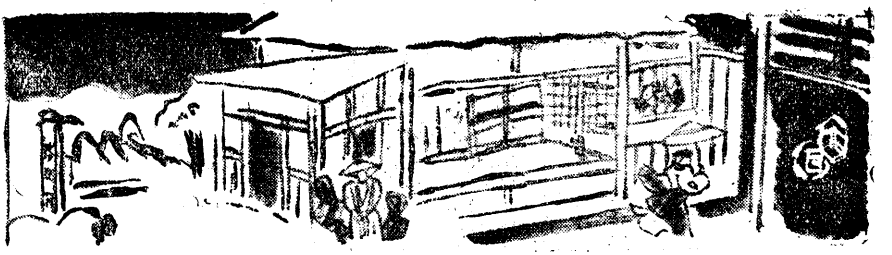
故豐竹巖太夫一週忌

追悼淨曲研究座談會

淨瑠璃時報社長藤田兼義氏事故豐竹巖太夫の一週忌を記念し、追悼の志ある素玄、批評家、舊時報の讀者等四月廿六日午後二時より麹町山王山「山の茶屋」に集ひ、未亡人藤田しげ子さんを招



待して淨曲懇談會が催ほされた。發企人は岡田蝶花形氏を始め故人と別懇の諸氏卅名にて、手向義太夫を五時迄、終つて研究意見發表、追悼座談など頗る盛會を極めた。



太棹　第百三十五號目次

表紙・カット……齋藤清二郎

口絵
第一回翼扇會……二代目竹本綾之助
故松林福笑氏追善……故豐竹巖太夫追悼座談會

大東亞戰下に於ける娯樂面……伊藤紅二（二）
千本櫻の三段目……西尾福三郎（五）
塵外居放談……煙亭（七）
文樂人形小道具帖（八）……宮尾しげを（一〇）
野澤吉兵衛のこと……齋藤拳三（一三）
淨曲淡想……內田三千三（一四）
會報・消息……（一六）
中老會より（和田春和）伊豆の催ほし（德永靜翠）
三好會（森三好）義太夫古曲發表會（事務所）
伊東溫泉より（德永靜翠）さゞ波會（濃沼薫）
其他

太棹社彙報……（二一）

大東亞戰下に於ける娯樂面

伊藤紅二

昨年十二月八日の曉闇をついて、まことこの世界あつて以來の劃期的な歴史的轉換が行はれてからと云ふものは、わが朝野の耳目を衝動せしめたことは勿論ながら、そはそれ國民的自覺のあらはれでもあつてみれば大人げなく騒ぎ立てる迄もないかも知れぬが、世界の、殊には敵性國米英一聯の國々の驚きと周章はまさに筆舌につくせぬものがあつた。

この驚異と轉換とを唯、單に、地球上人類の乃至は、日本民族の一つの隆起的なあらはれとみることは至つて淺薄且つ、皮相的な見方なのであつて、其處に歴史をはらみつつある現實——歴史的現實とおきかへるのは稍々御座なりの樣な氣もするが——と云ふ立場に於て、之は宿命的、因緣的、或は因果應報的、當然的な必然性をもつて十分に考へねばならぬものゝ樣である。

其處で、それを考へる場合に思辨的な先驗的哲學觀によることが最もあやまりなく、其の上に萬人に普遍妥當的に納得の行く方法であるとは思ふが、今、筆者はそんな迂遠なことに筆を走らせる氣持は毛頭ないので、これはこの大東亞戰の必然性を强調するのあまり、其の理論づけを民族的に立證しようと思つて一寸、筆がそれたものと解して頂き度い。

◇

所で、其の大東亞戰爭の絶對的な必然を、此處ではくどくしく說明するの煩をさけて專ら、扨てしからば、それほどの必然性を內包するものならば、必すや、其のあらはれも亦、常に必然と不可缺の要素をもつて終始せらねばな

らぬと云ふこと、例へば、一の文化的施設に於ても、決して、つけ燒刄や、一時的な糊塗をもつてしては相ならぬ。何處までも、民族的な意識――この場合わが二千六百年の歷史をはらみつつある日本民族のそれを指す――をもつてしかも自信と誇りとをもつた日本人的な生活意欲のみち〳〵たものによつて、打建てられなければならないと云ふことを第一にあげておかねばならぬ。

◇

論理を著しく縮少して唯、單に劍を持つてたつ所の武の面と、ともすれば對蹠的な意味に考へられ易い文化施設、文化工作のことのみにふれてしまつたが、如何なる場合と雖も、宙に浮いた樣な空虛な机上空論的なものを弄んだり又は外國の模倣や、直譯の施設を敢てして、事足ると思つたり、或は、よそのうけ賣りでわがこと終れりと空うそぶいたりしてゐてはいけないと云ふこと、勿論、一人よがりも始末に終へず、神がゝり的な內究の空疎もこまりものだが、こゝで爲政者が大思一番すべき文化工作の妙味もあり、獨創も重んぜられねばならぬ所以があると思ふ。

其處で、大東亞戰爭によつて當然、打たてられなければならぬ大東亞共榮圈內の文化面のうち、民力涵養や、民情醇化の面を擔當すべき厚生運動、健全娛樂、藝能文化のことは先づ、最も、民族的に根ざしをもつ所のものを以つて行はれねばならぬし、日本人的いきぶきをもつて、建設せられねばならぬと力說したいのである。

冒頭に、つけ燒刄絕對不可と提言した意味も全くこゝに理由がある。

◇

わが國民性に根さしをもつて、血となり肉となつた國民的な藝術や、鄕土のかほりと國土のニューアンスのある、その物がちかに祖國日本の精神にふれあふ所の素材は輕視すべきではない。

獨逸あたりのことをもつて來ることをあまり快くは思はぬが、獨逸バワリヤの山莊に住まつてゐるファーゼル博士はもう齡六十を出た人であるが、ピアノを彈きヴァイオリンを奏すると云ふが、それは何處迄も、演奏者としての職業人ではなくて、全くの素人であつて、其の博士の宅では、木曜の午後から夜にかけては家庭團樂の夕が設けられて一家中が皆、むつびあふのだと云ふことだが、このなごやかさが日本に果して幾家族あるだらうか。

娛樂と云ふことは、もはや贅澤品ではないのであつて、生活必需品である筈で、平出大佐は其の放送の中で「音樂は軍需品である」と喝破してゐるのをみても、近代生活に於て特に、其の面の重視さるべきは云ふをまたない。

唯、この場合、くりかへし云ひ度いことは、つけ燒刃であつてはいけないことゝ、あく迄も、日本的のものでなくてはならぬと云ふことである。

日本人には日本的のものがもつともふさはしく、又一番、その心性をゆるがすことは論をまつまでもない。

こゝで自分は、日本の民謠、俚謠などのもつ國民性の結びつきを大いにみとめ度いのである。

地方の民謠や俚謠などには、ひなびたを云ふ一面に之も云はず、人間性をゆりうごかすエトワスがあるのに驚く。

このことは又、何かの機會に述べたいが、この俚謠調がわが國民性に浸潤してゐて、突嗟の間にも發せられる例を吾々は度々みせつけられる。

現に、大東亞戰爭緒戰に於けるハワイ特別攻擊隊のあの烈々たる勇士の中に

泣くななげくな一度はかへる　桐の小箱ににしきて

と、それとなく口ずさんで勇躍死地につき不退轉の盡忠行動を敢てした一事をみるにつけ、そは百千の辭世にもまして、吾々をアツピールする力のあるのを認識するだらう。

俚謠、民謠のもつ魅力は其處にある。その時、同じく

君が爲、何惜しからん若櫻、散りてかひあるいのちなりせば

の三十一文字も、さぞかし心境は同じであつたらう。其處に吾々はつけ燒刃ならざる日本人のみのもつ强味以上のものを見出すのだ。

◇

之等を總じて、自分は日本的のものゝ自覺と云つたが、それは何處迄も、生活に浸潤してゐることを必要とする。

人性に悦悦と希望とを與へる文化財の必要なことはかくして知れるのであるが、更に、其の上に獨逸流の考へを加味するならば、「樂しませて働く」と云ふことが又當然考へられなければならない一要目である。

諄化された娛樂と云ふものを生活をいやが上にも向上するものである。

稍々索强附會にもなる樣だが、親子兄弟が共に樂しまれると云ふ點で、吾々の家庭にいくたりかのガラマサドンがゐてよいわけである。

其の理由はさきに述べた、鄕土藝術としての民謠、俚謠の存在理由と稍々似かよつたものをもつと思ふ。之については又稿をあらたつべき性質のもので、こゝでは紙數がつきてゐて意をつくさぬ。（筆者評論家）

千本櫻の三段目

―四月の文樂座―

西尾福三郎

今月の文樂も例によつて賑やかな、餘りにも賑やか過ぎるお膳立てゞある。

都合六種の內新作は二つあつて、一つは既にお馴染の連獅子、これは中幕向きのものであるが、今度は初つ端に据えてゐる。次は新口村で、三つ目が千軒長者の山の段と云つたやうな排列で、格式や古例の姦しい文樂の、この頃の狂言立てが總じてこのやうな御都合本位な事は一考すべき點である。

狂言六種の內、問題になるのは矢張り古靱のすし屋を中心にした千本櫻の三段目で、椎の木を大隅が、小金吾討たれを和泉が受持つて、この兩者ともそれ〴〵格に恰つた藝を見せてゐるので、こん度の三段目全體がむらのない傑出した味で好感される所以である。

大隅はこの所沈滯氣味でとかくの評を耳にしてゐたが此度の椎の木は久し振りでこの人の柄に嵌つたか快いヒツトを見せてゐる。何處と云つて取り立てゝ云ふ個品とてはないが、この人の粗剛な味が椎の木の權太を一刀彫りの細工物をみるやうな趣に仕上げてゐる。それを亨けたお次の和泉が又、この人らしい素撲な味で端場を生かして語つてゐる。そこで初めて古靱のすし屋の場が快く味へると云ふものである。

先づ權太の出の乙聲がうまい。それから維盛と彌左衞門との述懷、お里のさわり、最後に權太のもどりと、それ〴〵の正念場を緩急自在に表現し得てゐた。初めてきいた時には權太手負ひの條りで〳〵いがんだ俺が、直な子……が棒になつて、いがんだ俺がで一寸きり、すぐな子と續けてほしいものが何うもうまく行つてゐなかつたが二度目の樂日近い頃には滿足にやつてゐた。恐らくこの條りの出來不出來が全體の價値を左右するのではないだらうか。卽ち權太が妻と子を嘆けば、彌左衞門は又その

後で權太にかけ善太にかけて我子と嫁と孫とを嘆く、親子三人の嘆き合ひがそのまゝ一家五人の悲劇を物語つてゐる所が全段の中で尤も情の深い個所で、古靱としても恐らく精根を傾けつくして語つたのであらう。いつもは割合前半がよくて後半がまくれ氣味になるのだが、今度はさうした危氣もなく全場を通して約一時間と三十分餘り、緩急自在に、しかも相當の餘悠を保つて語り終つた事は何と云つても偉とすべきで、いよ〳〵精進勉强の效驗が著しく眼についてきた事を心强く頼母しく感じさせる。たゞ不審だつたのは、後段陣羽織の條りで維盛出家のキツカケである內ぞ床しきの所を飛ばして語つた日があつたが、時間にしても大して長くもならないこの個所をカツトしたのは、何故だつたか譯が分からない。

清六の絃も卽かず離れず、實にピツタリと影の形に添ふ如くで、まことに內助の效著しき女房の味をしみ〴〵感じさせる。人形では榮三の權太、文五郎のお里俱によく、とかくピンシヤンしたがる文五郎の娘使ひもお里には申し分なく嵌る譯で、前の二場を出遣ひで務めて、すし屋だけを黑衣で出したのも古靱の良心的演出と認めてこれもついでに褒めておかう。人形の演出で面白いのは權太が繩つきの妻子を見送つた眼をフト梶原と見合せてテレ隱しに陣羽織を冠つてしまふ個所である。一見權太の肚が梶原に分つてしまふやうで、底を割る氣味があるが、これはこれで人形らしい稚拙感が出てゐて、興味が多い。

以上の外では眞珠灣の九勇士の一人上田兵曹を取扱つた新作、水漬く屍が色んな意味で問題となる。作詞作曲は西亭事野澤吉左、太夫は織太夫團六の獨演である。何しろ萬人崇憬の的である軍神の殉忠を取扱つたものであるから一般に强い感激を與へてゐるが、これは何と云つても材料そのものゝ嚴肅な威力であつて、作詞作曲、出演者の藝の力に負ふ所は極く少部分にすぎない。幸ひにして好評とあつて來月まで打越しとなり、出演者と作者が白井社長賞を受與される事になつたが、上記したやうな意味でその功の大半は作品の材料そのものゝ比類なき精神力の賜であつて、この外に織太夫その人の謹嚴な語り口も賞すべく、全三場を一人の太夫に受持たせたアンサンブルの味も效果あらしめた理由であらう。作詞や裝置その他の點についてはまだ研究の餘地が相當殘されてゐると思ふ。

切りに野崎村があつて綱造の絃を主に、住太夫の久作七五三太夫のお光で、これに常子太夫改め田喜太夫のお染が拔擢されてゐる。いつも云ふ事だが、この場の婆さんを略する事は何う考へてもよくない事であるから筆者としてもこれを批評の對照にする事は御免を蒙りたい。田喜太夫は美聲で結構だがやゝ聲を振り廻しすぎる。今の伊達太夫が小春太夫の時分にそつくりで、聲を賣り物にしやうとするから足の長い語り口となる。(以下十三頁)

塵外居放談

煙亭記

▽吉右衞門句集△

＝高濱虛子君の序文＝

暮から寢込んで、二月三月まで、一歩の外出も出來ない業病？に惱まされ、その癖、安靜に火鉢の火でもせゝつてゐれば、殆ど何ともない容體であつて見れば、その退屈さ加減は諸君御想像以上のものである。ラジオと新聞と雜誌で百日の日をくらしたが、そのラジオも、大東亞戰爭の餘波を受けて、開戰當座は波長の關係もあり、拙宅の古い器械は故障ばかり、碌々豪華版の演藝にも遠ざかつてゐる時、豫て、新聞の紹介欄で承知してゐた我が中村吉右衞門君の句集を惠まれた時の喜び！　實にかぶり付くやうに讀み耽つたものであつた。

裝訂の基紙に二つの柿を描いたのは、安田靫彦氏の麗筆である。題字並に序文は、吉右衞門君の恩師高濱虛子君である。別に『はりまがた』と題した川合玉堂氏の口繪も大に光彩を添えたものである。

昭和六年から昨十六年に至る十一年間の作句二百七十五句が、一頁に三句づゝ、三號活字を以て組まれた贅澤さ、外に隨筆めいた短文約二十章が九ポで挿み込まれてゐる。舊四六版の百八十三頁。中央出版協會の發行で、定價壹圓八拾錢とある。

虛子君は、その序文で、所謂寫生句といふ建前の、目前に見た景色をたゞ寫す、といふ敎へを守り、

木々の芽に少し開けありむさう窓

といふ句を『それでいゝのだ』と言つたと書いてゐることほど左樣に、讀過した處、その多くが、卽ち目前に見た景色をたゞ寫してゐるやうである。それでゐて、中々巧いのが眼につくのは豪い。けれども、あまりに見た通りであり、又樂屋落ちといふのが又少くない。吉右衞門と署名し、何か前がきでもないと一般の讀者には判らないものや、變哲もないといふのがあるのである。今、少しばかりその芝居の句を拾つて見る。

新しき着到板や初芝居
白粉の殘りてゐたる寒さかな
元日や舞臺稽古の長かりし
門弟の名札そろふや鏡餅
晝ばてや冬日の殘る東山
道かへて櫻の道を歌舞伎座へ
冬霧の京都の町や樂近し
歌舞伎座も中日過ぎたり初句會
初春や歌舞伎座前の人通り
蓮池の寺を拔ければ芝居小屋
糸瓜忌に三升も居て古風なる
おはやしの暑氣中りしてゐたりけり
久々の下り役者や近松忌
看板の大羽子板の歌右衞門
門弟の古きがさきに鏡餅
稽古場に飾る鎧や菖蒲の日
東山すだれ越なる樂屋かな
歌舞伎座のとんぼ返りの寒稽古
無花果や隅の座敷は吉之丞

それから、吉右衛門には昔から秀山といふ雅號があるが、虚子君は總て「吉右衛門」で通した方がよい、俳優の方でも、二代目吉右衛門など作らぬ方がよい、といふのに對し、波野君も、私も其積りでをりますといつたとやら、我は鎭西八郎にて、のイキであつて、頗る面白い。

隨筆の方も、文章よりも事實がおもしろいので、我等芝居好き、殊に吉ッちやん贔負の者には、極めて興味深い讀みものである。虚子君も、淡々として事實を敍して居て、それで深い味ひが有る、と評してゐる。

ホトトギスの雜咏には阪東みの助君の方が、先きの投句家であつたやうに思ふが、近頃はやらぬらしく、吉右衛門の一門、七三郎、吉之丞、辰之丞等諸君の投句をよく見かける。僕の知つてゐる俳優の俳人としてはホトトギス派ではないが、堀越の三升君があり、その俳畫と共に、夙く一家を成してゐる。子規先生時代からの人に、今は故人になつた菊五郎門下の伊三郎、後に尾上松助の福島甲羽君があり、甲羽君は文章も頗る達者で、我等は古いホトトギスで愛讀したものであつた。

とにもかくにも、病床の我等を愉しませた此の書に感謝し、更にその「あとがき」を讀んで、素地の我吉右衛門君その儘なる謙虚さを嬉しいとおもつた。

▽河合武雄逝く△

‖初對面の日の追憶‖

新派の名女形河合武雄君が、長い病氣のやゝ快方と聞く間もなく、遂に所謂蓮臺座へ乘込んでしまつた。も一度舞臺に花を咲かせてやりたかつたのは僕のみではあるまい。僕が河合君と舞臺以外の初對面は、今より三十餘年前、明治四十年の春、伊井蓉峰君と共に、新富座の樂屋であつた。それは、東京府、市と商業會議所聯合主催の大博覽會が上野公園に開かれた時、僕は萬朝報社の政治部に籍を置いてゐて、報知、中央、國民、自由通信社などの府市政關係の記者が幹事となつて、日本に初めての全國記者大會といふものを開催した時であつた。

千家府知事、尾崎市長、中野商業會議所會頭といふ三巨頭の賛同を得て、先づ芝紅葉館に於て頗る盛大な歡迎會を催ほし、更らに歌舞伎座の舊劇と、新富座の新派劇が、歡迎招待會を、其他、三越だとか、麥酒會社だとか各方面の東京名物を案内して、全國三百餘名の來會者を、クタ〳〵に弱らせる歡迎責めをやつたのであつた。若い時からの道樂が役に立つて、僕は主として演藝方面の肝煎を承はつて奔走したのであつた。

紅葉館の大會餘興には、三遊亭圓喬の落語、丸一仙太郎（今の小仙は十歳前後の若太夫であつた）の太神樂に、幸四郎（當時の高麗藏）を煩はして、先代藤間勘右衛門老の袴踊を出演させたのは成功であつたと記憶する。歌舞伎座は、まだ松竹乘込み以前の事で、大河内社長の書面を

持て、支配人田村成義將軍が、牛込の拙宅を訪問され、諸般の打合せを行ひ、その時の狂言は、春日局、勸進帳など、今の所謂豪華版興行であつた。新派の方は、伊井河合の女夫劇（とはまだ言はなかつた）が新富座に人氣をあふつてゐる時で、泉鏡花の瀧の白糸と近松劇（藝題を忘れた）で、何れも二階三方全部を其席に宛て、菓子辨當壽司、所謂當時のカベスに、繪葉書其他お土產澤山で會衆大滿悅の態であつた。

その新富座の準備打合はせの爲め僕は一夕伊井君の樂屋を訪問し、幕合に、河合君と共に、種々の協議をした。今ならば、そんな事は、松竹の方卽ち仕打との交渉であるべきだが、當時は伊井、河合の兩君が自から萬事取仕切り、そして、座方其他へ命令を發するのであつたらしい。その近松劇の演出？かどうか知らぬが、漸く學校を出たか出ぬかの時代の小山內薰君が、カスリの着物か何かで、樂屋へ出沒してゐたのを覺えてゐる。

當夜閉場頃には、篠つくばかりの豪雨となり、ともかくも、こゝでは落ち〳〵話も出來ませんから……と勸められるまゝ、閉場と共に、僕は兩君と車を連らねて新橋の某旅亭へ連れて行かれたのであつた。全國の重なる新聞記者といふので、伊井君等の此の話しに對する乘氣は大したものであつたことは、特に記者大會と銘打つた記念の寫眞をこしらへ、當日の歡待至れり盡せりであつた事でも判せられた。その晩餐の席上に現はれた美妓が、今度未亡人になつたお榮さん、卽ち當時の榮龍姐さんであり、伊井君の方も、僕は知らぬが……やはりその……であつたのであるんである。

その後二三年を經て僕は、同じ社の社會部の方へ轉じ、殊に演藝方面の記事も手がけるやうになり、每興行に、職業的義務的に芝居を觀るやうになつたので、自然、觀劇の際は殆んど必らず樂屋を訪づれて、兩君とも愉快に會談する機會を與へられたが、伊井君はアレで、喜多村君ほどでは無いが、純然たる江戸ッ兒調子の豪快な談し振りであるに引替へて、河合君は、さすがに女形で、扮裝最中の部屋へ闖入すると、ハッと驚いて、居ずまゐを直し、はだけてゐた腰卷の前などを、慌てゝ合はせたり何かして、いらッしやい、と首をかしげて挨拶されるなど、微笑ましいものがあつた。

大谷馬十といふ舊役者の子と生れ若い頃、澤村源之助の弟子になつて百之助を名乘つたほどあつて、河合君は、僕等が道樂に演つてゐた通話會の素劇にも、每回お榮さん同道で見物に來られたのを見かけたものだつた。とにかく、喜多村君、河合君など、新派の女形舞臺の巧さは、實に特異的なものであり、全く惜しい人を故人にした、といふのほかはない。

（十五頁へつゞく）

文樂人形小道具帖（八）

宮尾しげを

極彩色娘扇

永代濱の段

脇几　二
煙草盆　一
筆紙包　一
あみがさ　一

兵助内

机　四
本　四
碁盤　一
財布（碁石入）　一
でっぽ　一
掛軸箱　一
ヘッつひ　一
釜　一

火ばし　一
火吹竹　一
財布に小判　澤山
竹杖　一
てじまござ　一
提燈籠　一
藥紙包　一
ぶら提灯　一

扇屋熊谷

五條橋

脇几　二
扇折臺　二
叩き　二
煙草盆　一
切首　一

紫風呂敷　一
笛　一
硯箱　二
大あみ笠　一
十手　四
馬　一

志渡寺

さんを　一
かわらけ　一
かん鍋　一
桃　三
木太刀　四
守り（仕掛）　一

膝栗毛

赤坂並木

荷物　二
つま折笠　二
竹杖（馬糞付）　一
棒　一
德利　一
ばちようかさ　一
葬禮提灯　一
經帷子　一

古寺

ぽくり下駄　一
つけ木　一
縄珠數　一
大木魚　一

木魚叩き棒 一
金包 一
竹等木 一

釣女

瓢簞 一
かつら桶 一
大盃 一
釣竿 一

合邦

紙位牌 一
鏡 一
鐘木 一
煙草盆 一
長煙管 一
つまをり笠 一
旗（閻魔用） 二本
百萬遍珠數 一
りん 一
子くさ 一
あわび貝 一
丸盆 一

茶椀 一
土びん 一
重箱 一
鉢 一

神崎東下り

三島宿

牀几 一
煙草盆 一
丸盆 一
茶椀 一
矢立 一
詑證文 一
金包 一
つまをり笠 一
文箱 一
風車 一
一文字かさ 一
竹つゝ 一
世話の馬 一

六太夫内

机 一
湯のみ 一
金包 澤山

中將姫

長卷狀 一
蛇目傘 一
割り竹 二
岩永火鉢 一
駒下駄 一

鞠當

深編笠 二

大文字屋

菰まき 一
荷物 二
長箱 一
けつかい（帳場格子） 一

八方（行燈） 一
算盤 一
帳面 一
硯面 一
煙草盆 一
ぶら提灯 一
てしまござ 一
證文 一
楠紙包 一

野澤吉兵衛のこと

齋藤拳三

四月二十三日、永き故土佐太夫の相三味線で土佐太夫と共に引退した七代目野澤吉兵衛が、東京の出稽古中、芝の菊水莊と云ふ旅宿であつけなく急逝してしまつた。

第一戰は引退してしまつても、此の人はなか〳〵の故實通で、此の道の新進が稽古臺とするには最も大切な存在で誠に殘念千萬な事である。月の三分の一を或る二三の素義の稽古をするだけで、一旅宿にとじ籠つて居るのをもつたいなく思つてゐた人は、斯道の愛好者である以上、私一人ではあるまいと思ふ。

考い樣によれば三味線彈き程不遇な藝術家は少い、特に義太夫節の方は三味線彈過剩、太夫不足の今日、一人の太夫が亡くなると其の合三味線までも同時に埋れてしまう狀態である。

太夫、三絃の離散集合は御當人同士には其れ相當の理由の存在して居る事は勿論である、が、然し吾々愛好者側から此れを見ると、斯道の末期人材の少い時、何をおいても離れてはならない人が各自の潔癖や物欲からか、あまりにも單純に離散してしまうやうに思はれてならぬ事がなか〳〵多い。

近い例が友次郎、綱造にしても不足はあつても、やはり津太夫を彈いた時の方が幸であつた。道八の場合も、大隅に附いてる時が兩方ともよかつた。新左衛門も錣太夫を彈いてる時がやはり幸だつたのである。

其の點私は、土佐太夫、吉兵衛の一對と、古靱太夫清六のコンビを總明だと思ふ。

義太夫の三絃は初めの間は誰を聽いても大した差が解らないが、一種の風格を具備して三味線彈の藝が解る樣になると、太夫と同樣或は其れ以上に妙味津々としてつきない。

三味線彈の天才はだのほの見へる人程、晩年其の藝が崩壞しがちである。努力家ほど晩年まで其の藝が、いびつにならない。

現在實在中の老大家で、其の實例を拾ふならば、道八、新左衛門は前者で、友次郎、吉兵衛は後者であらう。私は後者型の方が好きである。然も吉兵衛は其の雄なるものの一人であらう。

吉兵衛の三味線は音がいゝ、腕が強い、間がいゝ、何一つ三味線彈として缺點がない。其れでゐて聽いて

て面白くない。卽ち私が師を凡人畑の勉强家が努力で到達した貴い境地とする理由である。特にあれだけの獨特の風格を持ちながら音に齒切れの惡さがあつた。亦あのうるさ過るカケ聲は、事も無げに彈いてゐながら、聽手には決して樂しさを與へなかつた。

唯、吉兵衞の最も違大な長所は、太夫の藝の後につゝましくも身をかくして、太夫を抱き込んで行く三絃本道の奧床しき藝術感であつた、あくまで自個を正面に現はさない椽の下の力持ちにあつた。

三味線の老大家が、晩年年下の太夫を彈く場合、ともすると見へる此の三味線を聽いてくれと云つた、太夫を手玉に取る樣な點は吉兵衞には寸塵も見られなかつた。

彼は或る時云つた、

「よく三味線彈きは太夫の女房と云ふ事を申しますが、私は太夫—三絃の關係は君臣の關係と敎へられました」と、師が土佐太夫の引退と共に進退を共にした事を私はもつとも千萬な事と思ふ。

亦第一戰を引退した以上、一日も早く野澤の宗家、吉兵衞の名跡をゆづりたいと云ひ暮してゐたのも床しかつた。

私は歌舞伎の立役より一步後に座ると云ふ名女形の樣な態度を師に見る事が出來た。

「義太夫は決して亡びません、今に誰か團平の樣な巨匠が出て來て、斯道を盛りかいします。私には其の力がありません。亦病氣もありますから」と寂しく語つた。

私は其の時、氣にもとめなかつたが、今にして思へば、彼も自分の健康には氣の弱い人だつたらしい。

師の最後の藝を聽いたのは、土佐太夫と共に櫻時雨の放送が最後であつた。兩人とも美事な出來榮えと其の印象がハツキリ思ひ出される。

土佐太夫が吉兵衞の藝を賞める事は實に非常なもので、「一度會つて御覽、一風變つた人物だよ」と云ふのが常であつた。

師の藝風が素人よりも、むしろ幕內の人に高く評價される藝風だけに古靱太夫が檜下になつた以上、何かの機會に高座に復活する機會の有る事を夢想して居た私は全く殘念でならない。

師が義太夫批評家として立派だつた事など、來月稿を改めて書く事としやう。

（六頁よりつゞく）

この點を將來の爲に氣をつけてほしい。外に越路の息子の、さの太夫が父の前名文字太夫を襲つて千軒長者の山の段で對王丸を務めてゐる。きびしい藝の世界では名流も凡家もない、要するに實力と精進のみだ。この場では仙糸の絃が遺がに景色を彈いてゐた。

連獅子や新口村については別に云ふ事はない。たゞ餘りに眼眩しいので應接に遑なしと云ひたいところである。

淨曲淡想

内田三千三

巖太夫忌

山王の綠葉が靜風に搖れる「山の茶屋」に、故豐竹巖太夫の追悼會が、先輩有志に依つて開かれた。

追憶談に更けた春夜、皆んなして、故人のレコード「假名手本忠臣藏」の床淨瑠璃を懷かしく聽いた。

三段目の「殿中」……羽左の判官——友衞門の師直、宗十郎の若狹之助と云ふ配役で、丁度師直が判官を詰る頃、蝶花形先輩の提案で、演藝畫報の安部豐先生が「みんな」を代表して、靈前に燒香した。

僕は靜かに合掌しつつ、ふと深韻のある奇智に微笑まされた。

喧嘩から四段目の燒香とは、故人が歌舞伎畠の人だつただけに、中々洒落れてゐる。さし詰め安部先生は大星で、……末席を汚がした僕は「諸士の一人」に當る譯である。

羽左の判官のスツキリしたセリフの餘韻が消え去らぬ裡に、どこか伊井蓉峰を髣髴させる故人の面影が瞼に浮び、歌舞伎淨瑠璃人の追悼會らしい散會に、犇々と心を衝く、豐かな劇韻を感じた。

春闇の夜道を辿り乍ら、新綾之助の、「故人は女義の爲めに盡力した」と云ふ懷舊談と、安部さんが云はれた「故歌右衞門が巖を評して、あの男の藝は淨瑠璃としては大したものではないが、チヨボ語りとしては、實に役者の仕良い床淨瑠璃を語つた」……と云ふ二つの話を再想した。

毀譽褒貶は樣々であつたけれど、義太夫淨瑠璃の社會的向上へ拂はれた文化的努力と……詞を語れぬ床淨瑠璃を、多年語りつづけ乍ら、歌舞伎狂言作者の如く因習に沈澱せず、チヨボ語りを、床淨瑠璃と改稱し、「歌舞伎淨瑠璃聯盟」を創設して活潑な行動性を具現した。

故人の强靱な實行力は、キビ〳〵とした彈力性があつた。只派手好みの宣傳性が偶々野心の如く曲解させた、其の鬪爭性と共に局外者から敵視された難點はあつたが、鋭敏な頭腦と事務的な能腕は、洵に惜しい才幹であつた。

舞臺の俳優と受渡しのメリハリの好さも、今にして想へば「コク」にこそ乏しいが、江戸前の淨瑠璃であつた。

吃又雜感

つい此の間の素玄會で、豐竹猿春の、「吃又」を聽いた。

「猿春會」初演の時は如何にも「將監」と「後室」が生硬で、バサ〳〵と砂を嚙むやうな「素つ氣」なさを感じたが、今度は研究されて味が出て來た。絶えざる精進主義が生んだ成果と謂へよう。

殊に「今霄は奇妙な事あつて」……の後室の詞が、不思議に中村歌扇の音調に通じるものがある。

將監は「氣魄の堅實さ」「藝の幅」が相當だ、表べは强く突放しつつ「心に不便」……と涙する師愛の眞底を描き出そうとする藝味が賴母しいが、惜しい哉も

う一息名匠の氣韻があり度い。

又平は「我がのどぶえを」……と「疊に喰ひ付き」……が優れてゐる。コセつかずに、激しい焦慮感を重厚に映出する技法と、暗憺たる絶望感を一杯に現出する迫眞性が印象深い、其れと臺頭の舞になつて「それは土佐坊これは又」……に壯重な心韻を浮べ「身こそ畫繪のさんする男」へカラリと變る自然さが好い味だつた。

「吃り」は眞險な熱演で、悽愴な寫實感を色濃く出すが、時に餘りに藝がムキ出しで鋭い、どこやらにおとましいユーモアが欲しかつた。

お德は此の人の「藝の長短」が結集して興趣深い。

最初能舞に喋り立てる處は、稍清冽な眞情味が前へ出て、陽氣な口輕さが、なめらかに「ばづま」なかつた。その代り「身は貧なり片輪なり」……は巧い、しみ〴〵と眞實感が胸迫つて「不具の夫」への、やるせない愛情を、滾々と滲じませる。

此處でお德の眞髓へ觸れるのは、常凡で無い。而し出立の所で喜悅に溢れて云ふ「喜びの舞を」……は、いささか清純過ぎて「娘」のやうに聽へた。

世話女房の潤ひを底に含む至悅の陽調であり度い。

雅樂之助は初演の通り快調で、相變らず好描する、淀みなくタタミ込んで、一の字を雄到に引いた如き爽感があつて佳作だ。

口馴れるに從つて……「クセ」や「我流」が出易いのに、猿春の「吃又」は正しい藝線を辿りつつ飛躍した。

之れは藝に「安堵」がない爲めに「タルミ」と「破綻」を招來させなかつたのであらう。

望蜀には……畫繪のやうな前半の滋味と、後半の洒脫な風味へ藝達する日を待望する。

三生の絃は、雄格に太夫の長所をグン〳〵「のび」させた、太夫を力一杯語らせ乍ら、急所をしぼつて行く藝韻が鋭美である。

特に又平が、沈然石面に自畫像を描く前のメリヤスが、氣韻が籠つて冴えてゐる。

初演の時の猿幸の絃は、如何にも纖巧で、猿春の短所を、ふくやかにカバーした。

猿幸は餘韻に於て優れ……三生は、迫力に於て卓出してゐる。

絃藝術の三昧境は、兩者の長所の集成と交流にあらう。（五・三）

（九頁よりつゞく）

素劇で想ひ出したが、先日都新聞に久保田萬太郎氏が、河合武雄を偲ぶの談話中、伊井がお三輪をやつた妹背山の御殿に、鰻七を村田正雄と言つてゐたが、僕が往年東京座で見た妹背山では、鰻七は藤澤淺次郎君だつたと記憶するが、その時に、高田實君が、アノ堂々たる體軀を以て鳥帽子折求女、實は藤原の淡海公に扮し、小田卷を手にしてノソリ〳〵と舞臺を散歩してゐたのを見た時のをかしさは、未だに忘れ難いものであつた。

會報 消息

中老會より

和田春和

淨瑠璃も少し目新らしい事をしなくては聽衆を引きつけることが出來なくなつた。中老會は御承知の通り五月五日正午から並木倶樂部で忠臣藏大序より十二段目迄全通し全掛合で上演した處、聽衆は廊下まで溢ふれて文字通り立錐の餘地もない滿員の盛況を極めた。それに置舞臺は會員沼井盛鶴氏の裝置で、本會の紋を淺黃色で散らし、四段目には此紋を鷹の羽の紋と取替え、七段目並びに九段目の背影などは非常な好評を博した。本會は今後年一二回は大會として是非目新らしい企てをして精進したいと思つてゐる。

伊豆の催ほし

徳永靜翠

前略今回豊澤猿之助、團司夫妻、岸竹史、寺岡三幸、湯淺光玉等の諸氏と同行にて伊豆溫泉に遊び、昨十六日午後六時より伊東寶家演藝場に於て公演會を開催し非常なる好評を博し申し候、當夜の語物は次の如くに御座候（五月十七日）

寶の入船（寶家愛娘）、沼津（三幸、龍太郎）、陣屋（竹史、猿之助）、新口（光玉、龍太郎）、吃又（靜翠、猿之助）

三好會

森三好

若葉薫る五月二日午後六時より駒形倶樂部に第十一回を開催せし本會は、近日稀なる大入りにて、當會出身の津滿子始めて三絃にて出演、番組左の如く人氣を博せり。

十種香（喜三香）、寺子屋（津滿子）太十（時昇）壺坂（梅聲）本下（巴好）野崎（三好彈語）綾淸、ツレ津滿子）なほ第十二回は六月六日菊川倶樂部にて、日吉（喜三香）太十前（津滿子）同奥（時昇）酒屋（柳正）の豫定にて、時間の都合で柳三好彈語り、尺八秋道出演の筈。

義太夫古曲發表會

事務所

貴誌前號發表の通り本會は五月二日午後五時半より、並木倶樂部で開催、大切千本櫻道行〇太夫三味線總掛合、結城孫三郎一座の人形入りにて滿員好評を博しましたが、次回は「敵討優臺華龜山道行夢の驛路」を發表、其外道中膝栗毛、藤枝宿より赤坂並木古寺迄、同じく結城孫三郎一座贊助出演にて十月初旬同倶樂部で開催する事に決定致しました。

伊東溫泉より

徳永靜翠

昨報の伊東より小生は猿之助夫妻兩氏等と伊豆山の相模屋にまゐり候同千人風呂の主人濱田三郎氏とは友人の間柄とて此處に於ても早速公演會を開催致し候

その席上猿之助夫妻兩氏のコンビにて先代萩を語られ申候、團司師匠は小生二三十年以前屢々聽きて今猶耳底に殘り居り候が、其後全然聽きたる事もなく候處、今日久振りにて拜聽致し、猿之助師匠の絃は申す迄も無之候へ共、團司師匠の藝の愈々圓熟して、例へばその地合といひ、或は息づかひ、口捌き等々一點の非を打つ處もなく、情の籠りし語り口には全く敬服仕候、その昔華やかなりし頃に比して更に一段の進展をみる此立派なる藝術が今日にては殆ど死藏致され居る事を甚だ勿體なく存じ候、殊に猿之助師匠が團司師匠の絃を彈かれ候事は今日が始めての由に御座候

敬具

（五月十八日夜）

さゞ波會

大森濃沼薫

五月一日久々で「さゞ波會」を催ほ致しました。何しろ見番がやかましいものですから、久しく見合せてゐましたが、餘り淋しいので內所で大井水神の富士見倶樂部でやりました。プロの印刷も致しませんので、番組だけをお知らせ致します。來月あたり越後へ行く筈でありますから其節又通信申上げます。

大森海岸さゞ波會（第廿二回）酒屋（秀の家）壺坂（春日）先代（資子）紙治（末吉）太十奥（薫）安達（廣助）、絃（雷糸）

▽素玄淨曲研究會　第四十四回を四月廿七日午後六時より相互倶樂部に開催。寺子屋（團照、玉勝）、先代（玉鳳、吉和）、吃又（猿春、三生、ツレ駒照）、四十五回は五月廿七日錦橋閣にて開催。十種香（吳羽、米翁、玉三（かなめ、都太夫）、組打（義昌、綱助）、儀作（若好、清一）、なほ四十六回は六月廿七日相互倶樂部にて開催し、花房、貴昇、悟堂、都太夫氏等出演。

▽女天會　五日十一日相互倶樂部にて第四十九回を開催。寺子屋（喜香、猿喜知）、鮨屋（叶、龜造、十種香（以興子、良造）、本下（喜らく、勝助）、山名屋（里松、良造）、先代（里芳、勝助）

▽三人會　五月十二日中澤巴、星野桔梗、田中丸一好の三氏が珍らしく顔を合はせて小石川倶樂部に開催鮨屋（一好、猿藏）、沼津（桔梗、綱助）、合邦（巴、猿藏）

▽熱海の仲よし會　仲よし會は五月十五日に熱海に淸遊、冠之、以興子、吳洲、龍鳳、赤城氏等應援出演のもとに聚樂演藝場にて義太夫大會を催ほし滿員の好評を博した。

太十（總掛合、猿三郎）、柳（赤城、友春）、鮨屋（龍鳳、友春）、先代（以興子、良造）、合邦（團鳳、猿三郎）

新口（一樂、良造）、中將姫（吳洲、猿三郎）、太十（美松、良造）、山名屋（稻幸、猿三郎）、寺子屋前（冠之、良造）、同奥（重豐、猿三郎）、十種香（八重垣姫、以與子。勝賴、團鳳。嫺衣、吳洲。謙信、一樂。六郎、美松。小文次、稻幸。良造）

▽淨聲會　五月廿日文化倶樂部にて開催。白石（義昇、素昇）、合邦（一三樂、蝶子）、沼津（乃菊、佳照）紙治（林昇、若好）、野崎（紫蝶、仙玉）、梅由（山生、鹿重）

▽仲よし會　書畫骨董の同業、一樂、團鳳、稻華、美松、重豐の五氏に依つて組織されてゐる「仲よし會」は五月廿九日相互倶樂部に開催。

▽綾秀會　五月十六日駒形倶樂部に開催、柳（翠瓢）、太十（紀鳳）、沼津（司光）、揚屋（綾登）、日吉（龍司）寺子屋（壽瓢）。同廿三日菊川倶樂部に開催。柳（翠瓢）、酒屋（綾登）、沼津（司光）、太十（治光）、合邦（壽光）揚屋（壽瓢）、紘（綾秀）

▽大日本素人淨瑠璃會　大日本素人淨瑠璃會（大阪）第十三回競演會は五月廿五日より廿八日迄毎日正午より四ッ橋文樂座に開演。藝術顧問豊竹古靱太夫、鶴澤友次郎。審査員竹本大隅太夫、竹本住太夫、豊澤團六、野澤吉彌、鶴澤清八（叶改メ）、伊東柳平、吾孫子檜、笹村ふんど。なほ三役賞（東西三役六名）、進歩賞（一等、文部大臣旗保持權、外寄贈の副賞）、（二等、文樂座榮冠旗保持權、外寄贈の副賞）、（三等、賞狀、外寄贈の副賞）、優秀賞三名（賞狀外寄贈の副賞）、團體賞（藝術顧問寄贈團體優賞旗保持權）とし、時變中は極力質素に賞品其他の諸費を節約して國防費を献金する事になつた。採點表は次號に掲載。

▽むつみ會　豊澤和孝連は地方へ清遊して語る時を「むつみ會」と稱し、二月小田原の御幸座にて二日間催ほしたが、又々六月三、四の兩日會を組織して小田原美濃政樓上に於て開催。

▽梅鉢會　祖先代々梅鉢の紋を受け繼ぐ人々によつて二月廿五日誕生した「淨曲梅鉢會」の第二回は六月廿五日並木倶樂部で開催。

▽竹本源太夫後援　豊竹巴太夫連の西野巴洲氏は在阪中竹本源太夫師を師として同師の後援者であるが目下源太夫東上中を機に五月廿九日夕より並木倶樂部で後援義太夫會を主催し、源太夫、巴太夫兩師の外巴洲氏及び同じく後援者たる增田喜城同喜香夫妻の兩氏が出演する事になつた。

▽女義若女會　會場淺草東橋亭第四十四回（四月十五日）鈴ヶ森（駒榮）八陣（素八、播磨一）、戀十（清司、猿玉）、宿屋（素次、素八）、野崎綾千代、猿玉）。四十五回（五月一日）白石（津賀重）、日吉（素次、素八）、合邦（小津賀、紋敎）、野崎（越駒、津賀昇）、太十（素八、播磨一）。四十六回（五月十五日）太十（駒榮）、

鈴ケ森（素次、素八）、辨慶（素廣、駒登久）、松王屋敷（彌周、猿玉、沼津（素八、播磨一）

▽小土佐を聽く會　素玄淨曲研究會主催にて五月二十二日午後七時より西戸越村瀨氏方に於て「竹本小土佐を聽く會」を開催。昨年小土佐師の古稀に當り同會にてその祝賀會を催ほした緣で、年一回研究會の爲めに出演する約であつた處、時節柄公開でなく今回自宅にて有志を招きて語つたもの。

▽津彌太夫獨演會　五月二十一日より三日間東橋亭にて竹本津彌太夫獨演會を開催、初日は紙治、太十の二段語りにて午後九時より岡田蝶花形氏が主となりて座談批評會を催ほした。

▽因協會へ意見提出　素玄淨曲研究會を代表して岡田蝶花形氏は日本因協會へ五行本字句其他訂正につき審議の件を提出。〔一〕五行本字句訂正の件、〔二〕原本院本に基き語られたき點、〔三〕發音及送り假名は古典的に正しく用ふべき事、〔四〕原本「院本」を必要なくして「又は誤つて」正せるものは舊のまゝに復すべき事

▽神馬里芳氏　深川古石場琴平神社の講元神馬氏は團體を組織して、五月三日夜出立、讃岐の琴平神社に參詣。屋島より德島撫養にまはり、鳴門より淡路島を見物、神戸へ渡つて楠公に參拜の上八日夜歸宅。豐澤芳太郎氏も同行して旅行好きの氏は團體と別れて再び德島へ戻り出雲其他を見物、歸途大阪に遊びて歸京。

▽猿喜知、扇之助連　豐澤猿喜知連の增田喜城、同喜香、豐澤扇之助連の黑川叶、岡田彌聲、三谷美谷古、行田いろは、それに豐竹巴太夫連の西野巴洲の諸氏は、五月十八日より三日間京都市北野會館にて伊東柳平、武田眞若、加藤其笑の三氏審査の下に開催さるゝ平安會に出演。三味線は猿喜知、扇之助兩師隨行。なほ赤垣（叶）、陣屋（喜城）、寺子屋喜香）の三氏は無審査にて出演。

▽白井會長賞　大阪文樂座四月興行に上演の「水漬く屍」は非常な好評を博し、白井松竹會長は作並に作曲者西亭事野澤吉左、演者竹本織太夫、竹澤團六の三氏へ會長賞を贈つた。

▽加藤清二郎氏類燒　四月二十五日夜淺草公園六區の火災に加藤清二郎（加藤）氏經營の須田町食堂淺草第一營業所が類燒の厄に遭つた。廣瀨いろは氏は幸ひに類燒を免かれたが、須藤米司氏も此附近にて一時は危險であつた。

▽古曲發表會と肩衣　今回古曲發表會で使用した千本道行の肩衣は嘗て朝太夫存命中の古曲演奏會へ一朝會の鈴木一朝氏、四芳會の神馬里芳氏等が寄贈したもので、この引拔きの肩衣を修製して今度始めて同會に依つて使用されたのである。

▽樋口氏歡迎會　淨瑠璃雜誌主幹樋口吾笑氏の東上を迎ひ六月七日

午後五時より新橋驛前工業會館に於て素玄淨曲研究會の主催で歡迎會を開き、併せて岡田氏が因協會に對し提出の字句訂正の件につき古靱太夫師よりの來信を中心に論議を行ふ。

▽義太夫ぶり「壺坂」　五月二日夜日本青年館にて開催の柳町美代繪新作舞踊公演で、金川文樂構成、柳町美代繪振付、平山蘆江氏介添の下に新舞踊、壺坂「貞女お里」が柳町美代繪に依つて發表された。太夫は竹本綾千代、絃豐澤猿玉、ツレ豐澤玉枝。なほ此の「貞女お里」は昨年十月十五日日比谷公會堂で花柳志壽枝が發表すべく金川文樂氏より許可を得たが、其日も待たず不幸にして志壽枝は死去したので、その遺志を代つて今度美代繪が發表したものである。

▽故土佐太夫の碑　井上聲鳳氏は故竹本土佐太夫の碑を向島某寺に建立し、五月五日除幕式を擧行。故人未亡人並びに故伊原青々園氏未亡人の外、岩崎家代理、米太夫、鏡太夫、土佐子太夫等に、素美界では中澤巴、吉田三芳氏が招待されて列席

寄贈新刊

▼日本百貨店總覽（百貨店新聞社編纂）卷頭に全國及び滿鮮の百貨店店舗の寫眞百三十餘葉の外大陸に進出の各店舗十葉を添え、商工次官椎名悅三郎、日本百貨店組合理事長關屋延之助、同常務理事伊藤重治郎、百貨新聞社長德永靜翠氏が序文を執筆、伊藤重治郎氏の本邦百貨店發展史を始め、日本百貨店組合名簿並びに各店舗の沿革を詳述し、九一二頁より成る昭和十七年版。德永靜翠氏寄贈。（一冊金貳拾圓。京橋區銀座六ノ四百貨店新聞社出版部發行）

▼義太夫盛衰論（副島八十六氏著）義太夫節二百餘年間の盛衰より現今の淨界に及び、著者獨特の筆を以て說きたる斯道愛好者必讀の良書。攝津大掾眞筆義太夫訓言、挿繪十數種。森鷗外、坪內消遙、田中正平、高野斑山、幸田露伴、杉山茂丸氏等序文。（一冊金參圓。京橋區銀座六ノ三大日本淨曲協會發行）

□淨瑠璃月報□みどり□淨曲新報□大日本淨瑠璃界□淨曲研究□淨瑠璃雜誌□千里□文樂藝術□杉山田庭氏私信□サンデウ□白塔

巖太夫一週忌

岡田蝶花形

ひろ〳〵の松戸靈園の一角にそゝり立つなり巖の墓は
百花亂れ世は春爛けてわが詣る巖太夫の墓も萠え立つ
一週忌逮夜がはりに妙心寺『君御出陣には及ばずとも』を
生前の喧嘩好きの巖なりしてまた追悼會にも論戰あはれ
巖なる追悼會は語るのみの會にては少し物足らぬらし

太棹社彙報

本欄は大會又は新生の會を報導致します。開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。特種の催ほしの外前書きを略します。番組御送附なきもの、或は通信なきものは記載洩れとなります。御諒承を乞ふ。掲載順不同。

（太棹社）

東都五十義會春季大會

東都五十義會は、會長細川清氏の努力に依り、名譽會員として一條實孝、井上伊三郎、林銑十郎、鳩山一郎、德富猪一郎、大谷竹次郎、岡喜七郎、川島義之、川村竹治、勝正憲、中島知久平、中澤定治郎、久原房之助、柳原義光、山崎達之助、小林富次郎、荒木貞夫、櫻內幸雄、三室戸敬光、宮田光雄、南弘、三木良英、鹽澤幸一、廣田弘毅氏等〔以上イロハ順〕の快諾を得た事はおそらく素義會として未だ例なく、しかして高瀨操氏を副會長に顧問及び相談役には帝都素義界の重鎭を網羅し、益々基礎を堅固ならしめ、出演申込みは毎回定員に達し、新人も又頗る多き隆盛を見るに至つたが、六月八、九十の三日間、濱町日本橋倶樂部に於て吉田三芳、安藤光樂、長谷川文久高瀨操の四氏審査の下に第卅六回春季大會を開催するが今回より今までに大關の榮冠をかち得た人々をして無審査にて出演せしめ、なほ毎日の露拂ひとして理事が第一席を承る事になり、その傳統を誇るに足る上に又大に意義あらしむる事になつた。

【初日】國民儀禮式、開會の辭〔理事野島貴昇〕、宿屋〔理事市菊、扇之助〕……酒屋〔好玉、鶴玉〕、忠六〔一兆、播磨一〕、忠三〔松玉、駒登太夫〕、太十〔一朝、染登〕、辨慶〔若松、猿平〕、寺小屋〔清昇、團市〕、十種香〔吳羽、米翁〕、酒屋〔綾登、綾秀〕、十種香〔豐、猿平〕……陣屋〔隅斗、絃平、無審査〕……十種香〔都竹、都太夫〕、沼津〔古清、清司〕陣屋〔壽光、團市〕、菅四〔三車、重子〕、陣屋〔錦、團市〕、合邦〔瓢登、駒登太夫〕、阿漕〔駒司、昇之助〕、志渡寺〔花光、團市〕、朝顏〔百塚、播菊〕、太十〔治光、綾秀〕、先代〔竹糸、駒登太夫〕、陣屋〔吾樂、昇之助〕、鳴戸〔紅陽、染登〕、明烏〔玉竹、重吉〕、朝顏〔正鳳、道之助〕、玉三〔かなめ、都太夫〕、又助〔彌聲、扇之助〕……岡崎〔旭、道之助、無審査〕……鮨屋〔東好、和歌吉〕、鳴戸〔松玉、絃平〕、岸姫〔淺路、綾之助〕玉三〔美義、重子〕、逆櫓〔龜鶴、道之助〕、布四〔呑笑、絃平〕、紙茶〔枝蝶、綾之助〕、橋本〔清、道之助〕、

挨拶〔副會長高瀨操〕、優勝旗牌返還式。

【二日目】白石〔理事壽瓢、龜造〕……十種香〔松美、粂一郎〕、儀作〔廣遊、廣路〕、安達〔しげる、素女若〕、忠六〔登龍、團市〕、寺子屋〔松巴、季美太夫〕、太十〔紀鳳、綾秀〕十種香〔光華、素女若〕、忠六〔柳汀、清司〕、沼津〔松鶴、素女若〕……吃又〔乃菊、綾之助、無審査〕……野崎〔生昇、都太夫〕、十種香〔蟻若、清司〕、太十〔都仙、都太夫〕、柳〔翠瓢、綾秀〕、太十〔喜照、綾之助〕、陣屋〔北壽、若好〕、安達〔喜樂、駒登太夫〕、陣屋〔喜昇、團市〕、岸姫〔淑登、昇登〕、儀作〔いろは、扇之助〕、松王邸〔松藤、松四郎〕、本下〔重尾、昇之助〕、太十〔榮玉、若好〕御殿〔靜、重吉〕、太十〔美谷古、扇之助〕、草履打〔扇柳、若好〕、陣屋〔喜玉、鶴玉〕……八陣〔彌生、辰六。無審査〕……鮨屋〔義昌、網助〕、壺坂〔梅聲、巴雪〕、鳴戸〔一幸、松榮〕陣屋〔一昇、綾之助〕、野崎〔喜鳳、道之助〕、布三〔都、絃平〕、太十〔市菊、福彌〕、阿古屋〔光玉、綾之助〕

【三日目】寺子屋〔理事乃菊、松四郎〕…辨慶〔喜樂、紀代松〕、毛谷村〔津城、重吉〕、玉三〔園樂、都太夫〕宿屋〔大阪、旭、道之助〕、十種香〔可笑、重子〕、阿漕〔文樂、扇之助〕十種香〔金扇、染登〕、鳴戸〔美幸〕、中將姫〔櫓、鶴助〕……大晏寺〔春和、絃平。無審査〕……太十〔美竹、雷糸〕、安達〔一廣、綾之助〕、寺子屋〔吉樂、鶴助〕、酒屋〔花扇、鶴玉〕、忠六〔都平、都太夫〕、太十〔豊國、道之助〕、寺子屋〔一、巴雪〕、舟別れ〔一義、播磨一〕、堀川〔小勝、重吉〕、酒屋〔神風、道之助〕、逆櫓〔清光、重子〕、伊賀五〔力、猿平〕、壺坂〔東雲、團市〕、沼津〔源綠、扇之助〕……岸姫〔千鶴、猿平。無審査〕……忠四〔いろは、團市〕、太十〔秋田、旭、猿藏〕、忠九〔花房、絃平〕……志渡寺〔京都、出雲、無審査〕……大切。堀川〔與次郎、桔梗。お俊、千晴。母、操。傳兵衞、隅斗。おつる、光玉〕、絃〔猿之助、ツレ、松四郎〕、挨拶〔會長細川淸〕、優勝者表彰。採點發表。閉會の辭〔理事 安藤都昇〕、萬歲三唱。

京濱素義聯盟春季大會

國友東光氏を會長とする京濱素義聯盟は第十回を重ね、五月廿日より三日間毎日正午より大井海岸見番演藝場に於て春季大會を開催、番組左の通り。

【初日】忠六〔勘平、東光。母、呂聲。彌五郎、貴昇。鄉右衞門、美義〕、絃〔重之助〕、辨慶〔さ章、重之助〕、鮨屋〔佳津子、佳照〕、太十〔喜照、佳照〕、岸姫〔淺路、佳照〕、

合邦〔小柳、新造〕、安達〔一廣、佳照〕、新口〔叶昇、新造〕、陣屋〔一昇、佳照〕、妙心寺〔吳光、新造〕、太十〔六花、清一〕、阿古屋〔光玉、佳照〕、忠六〔壽樂、朝見太夫〕、沼津〔乃菊、佳照〕、寺子屋〔三車、重子〕、阿漕〔駒司、昇之助〕、十種香〔可笑、重子〕、壺坂〔古清、松子〕、十種香〔吳羽、米翁〕、安達〔和子、重子〕、沼津〔呂聲、とり子〕

【二日目】七段目〔由良之助、貴昇。平右衞門、呂聲。お輕、義昌〕、絃〔網助〕、太十〔美幸、雷糸〕、十種香〔秀の家、雷糸〕、玉三〔美義、重子〕、鮨屋〔春日、雷糸〕、忠四〔花昇、新造〕、柳〔富枝、重之助〕、鳴戸〔紅陽、染登〕、岸姫〔淑登、昇登〕瀧〔可樂、新造〕、酒屋〔和風、染登〕十種香〔俵、新造〕、太十奥〔一朝、染登〕、合邦〔廣榮、廣路〕、安達〔東光、重之助〕、儀作〔廣遊、廣路〕、陣屋〔十三三、團蝶〕、帶屋〔松玉、彌國〕、太十〔市菊、福彌〕、壺坂〔桔梗、網助〕

【三日目】寺子屋〔源藏、古清。戸浪、さ章。千代、義昌。松王、十三三〕、絃〔雷糸〕、山別〔伊久子、雷糸〕、玉三〔世界、雷糸〕、朝顏〔正鳳、道之助〕、太十〔美竹、雷糸〕、布三〔都、絃平〕、酒屋〔神風、道之助〕、寺子屋〔登盛、新造〕、野崎〔喜鳳、道之助〕、布四〔呑笑、絃平〕、八陣〔可松、新造〕、伊賀五〔旭、道之助〕、大晏寺〔盛鶴、新造〕、忠六登龍、團市〕、陣屋〔瓢登、駒登太夫〕、鳴戸〔美幸、朝見太夫〕、本下〔さ章、朝見太夫〕、陣屋〔錦、團市〕同奥〔壽光、團市〕、鮨屋〔義昌、網助〕

東都 素義人形淨瑠璃大會

德島縣出身在京素義會が組織されて今年一月並木倶樂部に於てその第一回を開催したが、同會並びに團市會の主催に依り傷痍軍人及び出征遺家族慰安を兼ね、鄉土藝術を紹介すべく、遙々阿波人形鳴戸源之丞一座を招聘し、五月十八日より三日間毎日正午開演を以て九段牛ヶ淵軍人會館に於て東都素義人形淨瑠璃大會を催ほし、滿員の盛況非常な好評を博した。三日間の番組左の通り。

【初日】日吉〔いづみ、仙玉〕、草履打〔喜鳳、道之助〕、安達〔越松、圍市〕、宿屋〔正鳳、道之屋〕、佐太村〔ほくろ、團市〕、寺子屋〔千晴、團市〕、鮨屋前〔桔梗〕、同奥〔義昌、網助〕

【二日目】鳴戸〔豐、昇登〕、先代前〔以興子〕、同奥〔君光、良造〕、朝顏〔榮、仙玉〕、太十〔松濤、紋敎〕、寺子屋前〔一、良造〕、同奥〔たから、龍太郎〕、沼津〔醉壽、團市、ツレ、

紘內〕、合邦〔登龍、團市〕

【三日目】十種香前〔一樂〕、同奥〔以與子、良造〕、近八〔昇、猿平〕、安達〔ほくろ、團市〕、陣屋〔錦、團市〕、彌作〔いろは、團市〕、伊賀五〔操、道之助〕、志渡寺〔義昌、和孝〕

大阪素義銃後奉公會

——三年振りに東上、並木倶樂部で開催——

出征遺家族慰問の爲め乙女文樂を使用して大阪市內は勿論各地方に出張淨瑠璃會を開催し、頗る好評裡に藝能奉公の實を擧げて其名も全國的に知られた大阪鼎會は、本年一月より「大阪素義銃後奉公會」と改稱し創立五年にして既に回數六十回に及び、東京では一昨年淺草松屋ホールにて開催後、三年振りに東上、今回は坂東勝治、竹澤龍造一座合同の身振劇を使用して四月十六、十七の兩日並木倶樂部に於て開催。會員朝田一朝、村上信昇、石川力、白木草樂四氏の外東京方よりも應援として增田喜城、喜香夫妻の兩氏を始め、三並義昌、池田美尙、雷網氏等出演し二日間共出征遺家族を以て立錐の餘地もなく盛會を極めた。なほ六十一回は宮島劇場の豫定にて、六十二回は五月十六日より三日間富山公會堂にて開催。

【十六日】忠六〔雷網、朝見太夫〕合邦〔喜城、猿喜知〕、太十〔大阪、一朝、千鶴〕、戾橋〔大阪、信昇、叶太郎、ツレ、友三郎〕、先代〔大阪、草樂、友造〕、志渡寺〔義昌、和孝〕、廿四孝狐火迄〔大阪、力、力松、吉季〕

【十七日】玉三〔喜城、素八〕、鳴門〔一朝、千鶴〕、太十〔草樂、友造〕堀川〔信昇、叶太郎、ツレ、友三郎〕安達〔力、力松〕、寺子屋〔美尙、美之助〕、佐太村〔喜香、吉季〕

東都女義後援會

第二十七回を四月二十八日午後四時より並木倶樂部に開催。

竹の間〔駒榮、佳世子〕、鳴門〔佳世子、三勝〕、八陣〔越駒、紋敎〕、先代〔三勝、仙照〕、宿屋〔佳若、淸一〕、忠六〔素八、小播磨〕、五郎正宗〔彌周、三生〕、岸姫〔昇登、綱助〕酒屋〔若好、勝八〕、中將姫〔染登、猿幸〕

翼會

豐澤猿藏連の翼會は四月二十五日

正午より並木倶樂部に開催、例に依り滿員の盛況を呈した。

辨慶〔大嘉津〕、堀川〔山門〕、太十〔白猿〕、二十四孝狐火迄〔三由〕、絃〔猿藏、ツレ、猿三郎、松四郎〕、なほ五月は二十三日、六月は二十日いづれも並木倶樂部にて正午より開演。

くるま會

事變以來四年間神妙に休演を續けて來た坂倉素遊氏は、此際だから寧ろ義太夫を語るが好いと勸められて先月から稽古に通ひ出し、次いで同二年間休演中の赤尾梅笑氏も之又そろりと始めたを機會に、新宿廓中での野口みなと、倉田司樂氏と計つて廓をもぢつて「くるま會」を組織、これに金子里松氏が應援として入會し四月中に二回、第三回を五月四日夜神樂坂の相互倶樂部に開催した。

忠六〔梅笑〕、柳〔里松〕、日吉〔司樂〕、十種香〔みなと〕、喜內〔素遊〕、絃〔良造〕

淨曲 翼扇會

豐澤扇之助に就き斯道に精進してゐる扇華、茂玉、喜久壽、一光、いろは〔行田〕、美谷古、彌聲、叶、靜翠の諸氏に依り「翼扇會」が組織され、番組に添えて左記趣旨を發表し五月十日午前十一時より並木倶樂部に於て其第一回を開催し、大に扇之助連の氣を吐いて盛會裡に午後五時終演した。

〔趣旨〕淨曲卽ち義太夫の開祖は謂ふまでもなく竹本義太夫で、師は宗教的觀念から「誠」を語つた人であります。また二代目義太夫則ち政太夫は、自己の環境から「情」を語つた人であります。更に近松門左衞門は、所謂今日で謂ふ武士道精神、勸善懲惡を大處高處から書き卸したもので、この三人の思潮は、今日の非常時局下に於て、最も好適して健全娛樂の最高王座なるものと稱しても憚らぬと思ひます。依て其流れを汲んで、淨曲翼贊の意味をも含めて『翼扇會』と銘を打つて、その第一回を開催することゝなりました。何卒今後共絕大の御後援を賜はりますやう御願ひ致します。

膝栗毛〔古曲發表會三絃部特別出演〕並木より古寺迄〔彌次郎兵衞、猿喜知、喜太八、扇之助。親父、松市郎。長松、絃內、和尙、和孝。絃駒登太夫、ツレ、駒榮〕、車引〔扇華〕、鰻谷〔茂玉〕、太十〔喜久壽〕、宿屋〔一光〕、儀作〔いろは〕、岸姫〔美谷古〕、紙治〔彌聲〕、沼津〔叶〕、鮨屋〔神戶、池鶴〕、〔以上絃扇之助〕

大切。吃又〔又平、歌之助、靜翠。將監、奧方、修理之助、お德、彌國太夫。絃、扇之助、ツレ、猿喜知〕。

二代目 竹本綾之助襲名披露

既報の通り竹本佳照師は今回二代目竹本綾之助を襲名し、五月二十六日午後二時より濱町明治座にて華々しくその披露大會を開催。豐竹呂太夫が襲名口上を述べ、番組は左の通りにて大切千本櫻道行は文樂座桐竹紋十郎、吉田玉助にて、人形入りを以て素晴らしい舞臺を見せ、豪華絢爛、近來稀れな披露大會である。

壽式三番叟〔翁、重子。千歳、彌周。三番叟、佳仙。ツレ、綾清、綾作、佳津子、佳世子〕、絃〔勝八。ツレ、仙玉、清二、清三、仙照、駒照〕壺坂〔若好、勝八〕、辨慶〔綾千代、猿玉〕、新口〔東朝、仙玉〕、太十〔彌周、三生〕、紙屋〔越駒、紋敎〕、寺子屋〔住若、三生〕、鮨屋〔重子、勝八〕、合邦〔素昇、猿玉〕—休憩—

酒屋〔染登、猿幸〕、岡崎〔土佐廣、綱助〕、油屋〔小津賀、紋敎〕…襲名口上〔豐竹呂太夫〕……先代〔佳照改め二代目綾之助、清一〕、大切。文樂座人形入千本櫻道行〔靜、綾之助。忠信、住若。ツレ、越駒、綾清、綾作、佳仙、佳津子〕、絃〔清一。ツレ猿玉、清二、清三、清壽、駒登久、仙照、駒照〕

……人形……〔靜、桐竹紋十郎。忠信、吉田玉助〕

第廿六回 竹本素女會

歌舞伎座の大殿堂を滿員にし、開催の都度好評を博してゐる竹本素女會は第二十六回春季公演を今回は築地東京劇場に於て五月二十六日午後四時半より開演。

例に依り豐竹團司、豐澤小住、竹本春駒、豐澤仙平の外、帝都女義界の人氣者揃え、素女の寺子屋の後、大切として勝之助の絃で團司、土佐廣、小津賀、春駒、重子、彌周、素女といふ豪華な顔ぶれの掛合で、珍らく櫻時雨を上演した。

番組左の通り。

壺坂〔素次、素一〕、先代〔染登、猿幸〕、酒屋〔文昇、猿昇〕、太十〔素八、播磨一〕、柳〔素廣、駒登久〕、瀧〔東朝、仙玉〕、合邦〔春駒、仙平〕、鈴ヶ森〔團司、小住〕、寺子屋〔素女〕大切。櫻時雨〔前の吉野太夫、お德、團司。三郎兵衞、土佐廣。紹由、小津賀。五兵衞、春駒。傀儡師、重子。源吾、彌周。光悅、素女〕、絃〔勝之助〕、琴〔山室千代、飯村廣代特別出演〕

本誌後援名譽會員

（東京之部）

（イロハ順）

安藤都昇氏　安藤都竹氏　小川都山氏　吉田登盛氏　安澤（どく）　中藤平之巴氏　佐藤内（ほく）助（ろ）氏　宮島北斗氏　北野巴洲氏　西田春和氏　和村白猿氏　中田梅松氏　菅本梅笑氏　橋部月氏　阿部一氏　櫻井光氏　吉川浪補氏　關口以子氏　關口興樂氏　荒木一泉氏　高瀨一昇氏　鈴木一信氏　木村一司氏　水戸部（いづみ）氏　廣瀨（いろは）氏

岩崎（かん）昇氏　米澤雅樂氏　黑川叶氏　西田可松氏　高橋可遊氏　加藤（かなめ）兜氏　飛石山和曉氏　青木和勢氏　林木和樂氏　鈴木大熊氏　本里松氏　金林里昇氏　林神千芳氏　松馬竹鳥氏　岸本千史氏　久米中次氏　栗原千鶴氏　緒方千晴氏　保々長平氏　堀（とき）（わ）氏　外山富彌氏　高橋東好氏　國友東光氏　大熊都仙氏　平野都平氏

鈴木安部富兒氏　上杉文士氏　川田二三氏　長谷川文樂氏　福田中盛氏　篠倉又登氏　岡山下山久氏　本城彌糸氏　石川彌門氏　中野冠聲氏　水野華生氏　乃村吳之氏　乃野乃笑氏　小鹽羽氏　萩原（うつ）昇氏　太田（ぼ）菊氏　宮本無潮氏　川口武涯氏　新子太藏氏　井川月郎氏　坂上素美氏　杉倉素鳳氏　野山遊氏　根田高橋氏　小林團尾氏　井太壽氏　田上八壽氏　小口巽壽氏　森辰昇氏　大叶嘉津氏　用大

細川藤三氏　藤田本三氏　橋井山氏　平藤（さか）村（え）氏　齋木岡村幸氏　寺奥三玉氏　奥坂本（あ）氏　影山（を）氏　藤牧路氏　中川淺路氏　柳有淡氏　及淺愛氏　大川氷氏　堂築明氏　寶野藏前寺鐵天旭氏　桑原永葵氏　岡崎圓幹氏　中田五昇氏　山崎向樂氏　中島古氏　保谷紅六氏　田廣口氏　湯中光陽氏　田淺月平氏　松中湖司氏　河岡語笑氏　原野國玉氏　安田越月氏　藤光聲氏　樂巴氏

金田金鳳氏
錦錦松氏
淺田奇聲氏
星野桔梗氏
日野金泉氏
野島貴昇氏
岡本岡氏
歸山歸世花氏
平井軌外氏
橘本掬月氏
乾桔梗氏
增田喜城氏
增田喜香氏
三浦鏡鳳氏
和田金扇氏
澤部其角氏
荒木キクヱ氏
岩木義雀氏
吉良蟻若氏
山田義昇氏
三義昌氏
吉坂玉鳳氏
保坂有曲氏
西村游史氏
岩田末成氏
高瀨操氏
吉田美地句氏
横井三由氏
野口みなと氏
北村三葵氏

池田三國氏
吉田三芳氏
村上美津豆氏
須田美義氏
鈴木松寶氏
小原松樂氏
伊藤松鶴氏
龜田秋花氏
菊地紫月氏
花房壽蝶氏
山田司瓢氏
田口司重氏
倉田秋樂氏
濱口晉華氏
打矢昭水氏
西内神平氏
永野風氏
高瀨靜氏
武笠宏亮氏
高品一重氏
平山平茶氏
福安瓢登氏
桑原美峰氏
池田美尙氏
魚崎美福氏
松岡茂里雄氏
白井清華氏
近江清華氏
塚口清雀氏
佐藤清司氏

井上聲鳳氏
的野闕路氏
富岡生昇氏
沼井盛鶴氏
時田靜史氏
江原清昇氏
三浦扇華氏
德永靜翠氏
仁木翠松氏

（地方之部）

米國 杉山陶岳氏
同 兼廣廣玉氏
同 西本西紫氏
大阪 氏家鶴峰氏
神戸 岡田源氏
大垣 吉岡十八公氏
船橋 川奈部銀司氏
下關 保良鈴鳳氏
横濱 和田和朝氏
同 鈴木香雀氏
同 田中呑笑氏
同 小林榮玉氏
同 田島集樂氏
平塚 國森鳴門氏
川口 傍島紀鳳氏
八幡 古賀大彌氏
靜岡 加藤壽松氏
同 森魁氏

靜岡 山本梅笑氏
清水 久保田聲保氏
安東 岩崎山彥氏
北京 關長門氏

名譽會員

田中廣笑氏（再）
西野巴洲氏（新）
宮內ほくろ氏（新）
山崎向陽氏（再）
靜岡 山本梅笑氏（新）

右の諸氏今回本誌後援名譽會員御快諾を賜り難有御禮申上候

太棹社